

《研究ノート》 「数学半」の解釈をめぐって

林 文孝

「教うるは学の半ば」とは、教えることが教授者自身にとっても学ぶことの半分を成すとの格言である。ここでは教授者は、すでに学成つてその成果を一方的に教える立場ではない。教えることの困難をつうじて自らの学の不足を自覚しつつ、自身が学を深め成熟させる過程にあるものと捉えられる。教えることと学ぶこととのダイナミックな相互作用を示唆するものとして含蓄の深い名言といえよう。

この格言の出典は『尚書』説命^{まう}下であり、「数学半」というかたちで見える。また、『礼記』学記にも「兗命^{えん}曰、学学半」とある¹。前者の「数」字ならびに後者の上の「学」字は、隋の陸徳明の『經典釈文』が与える発音指示により「コウ」（字音仮名遣いでは「カウ」と読み、「教える」の意となる。これらを通じて、該当箇所²の解釈は、いわゆる古注・新注ともにほぼ一貫している³。このことから、現在用いられる意味が古くから標

準的解釈として定着していると、いちおうは言うことができる。

しかし、この句の解釈が完全に安定していたわけではない。とくに新注の周辺で、別解の存在を確認することができる。また、新注においても、現在通行の解釈から微妙に逸脱すると思われる部分が含まれている。

本稿では、新注の周辺における解釈状況を参照しつつ、「教うるは学の半ば」の意味を掘り下げることを目指す。私は基本的には、通行の解釈を支持する。ただし、新注というよりもむしろ朱熹に沿ってである。そのさい、朱熹が退ける別解や新注系の解釈に見られる逸脱を、朱熹の理解との関係において検討したい。この作業をつうじて、この格言の含意をより豊かなものとして見いだせるものと思われる。私が最終的に目指したいのは、現行の（たとえば大学の）教学体制のためにこの格言を利用するのではなく、この格言によって現行の教学体制を相対

化する可能性を示すことである。

なお、本稿を草するにあたり、先行研究の精査等、論文作成に必要な作業はしていない。元来が、この格言に触発された一種の随想として着想したものである。それゆえ、「研究ノート」と銘打つこととする。

一 古注と新注、その一貫性

経学においては古注と新注の別が問題となる。いわゆる新注そのものが、旧来の経学に対する刷新の意識に支えられており、解釈が違うことが多いからである。しかし、新注とて古注の成果を全否定しているわけではなく、むしろ一貫している部分も多く見いだされる。本稿で問題としている『尚書』の「数学半」や『礼記』の「一学半」はその例である。本節では、古注と新注とでほぼ解釈が一貫している様相を確認したい。

まず、『尚書』説命下の「数学半」について見ていく。

経文の文脈を確認しておく。「説命」は尚書に属し、殷王・高宗（武丁）が傳説を相としたさいの命辞ならびに傳説から高宗への進言からなる。現行本では上・中・下の三篇に分かれる。「説命下」では、まず、高宗が甘盤という賢臣から学びながらも諸般の事情で途絶してし

まったことの述懐があり、その高宗の求めに応じて傳説が学びの心得を説いている。その中に「惟数学半、念終始典于学、厥徳脩罔覺」とある。「典」は「常」の意。終始つねに学を思うならば、自覚もないままに徳が修まっていく、ということである。

古注は、前漢の孔安国の伝ならびに唐の孔穎達らの疏（『尚書正義』）である。伝は、現在では偽孔伝と呼び慣わされている。偽作の疑いは古く宋代から提起されており、朱熹も疑っている。しかし、ともかくも孔伝それ自体は唐代の公定解釈である『尚書正義』に採用されて相應の権威を持っていた。

該当箇所の孔伝に曰く、

教、教也。教然後知所困、是学之半。

「教」は「教える」である。教えて後に困難な点がわかる。これは学ぶことの半分である。

孔疏はこの伝に従って経文を敷衍している。

教人然後知困、知困必将自強、惟教人乃是学之半、言其功半於学也。

人に教えて後に困難さを知り、困難さを知ったら必

ず努力を怠らないので、人を教えることこそ学ぶこととの半分である。その効果が学ぶこととの半分を占めることを言っているのである。

孔伝・孔疏とも、あとで見る『礼記』学記を踏まえて解釈している。経書の記述どうしを整合化する志向性は、注疏の学に顕著に見られる特徴である。

新注は、朱熹晩年の門人である蔡沈が師の命を受けて作った『書集伝』である。該当箇所（「惟教」より「罔覚」まで）の注を、やや長文だが引いてみよう。

教、教也。言教人居学之半。蓋道積厥躬者、体之立。教學于人者、用之行。兼体用、合内外、而後聖学可全也。始之自学、学也。終之教人、亦学也。一念終始、常在於学、無少間斷、則德之所修、有不知其然而然者矣。或曰、受教亦曰教。教於為学之道半之、半須自得。此說極為新巧。但古人論学、語皆平正的实际。此章句数非一、不応中間一語独爾巧險。此蓋後世釈教機権、而誤以論聖賢之学也。

「教」は「教える」である。人を教えることは学ぶこととの半分を占めることを言っている。そもそも道がその身に累積する（直前の経文に「道積于厥躬」

とある）のは本体の確立であり、人に学を教えるのは作用の実行である。体用を兼ね、内外を合一させてこそ、聖学は全うしうるのである。始めに自分で学ぶのは学である。終わりに人を教えるのもまた学である。考えが終始、常に学のことにあつて、いささかも切れ目がないならば、徳が修まること、それとは知らずしてそうなってくる。ある人はいう。教えを受けることもまた「教」という。「教」は学問の道においては半分であり、後の半分は自得する必要がある、と。この説はきわめて新奇で巧みだが、古人が学を論じるとき、言葉はすべて平明で具体的である。この章の句数は一つではないのに、その間に一語だけかくも巧妙難解であるはずがない。これはおそらく、後世の仏教の対機説法であつて、誤つてそれで聖賢の学を論じたものであろう。

「教えることは学ぶこととの半分を占める」との意味で解釈するのは、古注を継承するものである。そして、ここで退けられている「或曰」こそ、次節で検討する別解にほかならない。

この解釈は、基本的に朱熹の考えを踏まえたものである。『朱子語類』巻七十九に、「説命」解釈をめぐる朱熹

と門人との問答が収められており、そこには「只当依古注（古注に従うべきだ）」との発言が記録されている。そればかりか、蔡伝に対応する文言をほぼ逐一指摘することが可能である。それらの発言は今後随時引用するので、ここでは指摘しない。

ただし、蔡伝に見られる「体・用」の論理による整理は、朱熹には見られない。のみならず、この部分をクロージャーアップするならば、古注はもとより、朱熹の理解からも逸脱していく可能性をはらんでいる。この点は第三節で検討しよう。

次に、『礼記』学記の「学学半」について見ることにする。

ここでは該当箇所の本文自体が「教学相長」を主題としており、その所説を確証するために「兗命」を引用する。すなわち、

雖有嘉肴，弗食不知其旨也。雖有至道，弗学不知其善也。是故学然後知不足，教然後知困。知不足，然後能自反也。知困，然後能自強也。故曰，「教学相長也。」「兗命」曰、「学学半。」其此之謂乎。

りっぱな料理があつても、食わなければその美味はわからない。至高の道があつても、学ばなければそ

の善さはわからない。それゆえ、学んで後に足りないことを知り、教えて後に困難さを知る。足りないことを知ってこそ自らに求めることができる。困難さを知ってこそ怠らず努めることができる。そこで、「教えと学びとは伸ばし合う」という。「兗命」に「学学半」というのは、このことであろう。

『礼記』の古注は後漢の鄭玄の注と唐の孔穎達らの疏である。「兗命曰」以下について、鄭注はこうである。「言学人乃益己之学半（人に教えるのは己の学の半分を益すことであるのを言う）。孔疏は、下の「学」を「習う」、すなわち「学習」の意と取り、とくに礼の学習として解釈している。

これに対して新注は、元の陳澧の『礼記集説』がそれに当たる。彼の採用した「劉氏」の解釈は、最低限の意味においては古注と一致する。ただし、『尚書』蔡伝と同様の問題がここにも伏在しているので、第三節であわせて検討することにする。

新注系経書解釈の学問的主柱というべき朱熹本人は、この箇所をどう解したのだろうか。これについては『儀礼経伝通解』を見るべきである。本書は、朱熹が『儀礼』を中心として礼学の新たな体系化を図ったものである。

朱熹在世中は未完に終わり、門人の黄榦らにより続修された。その巻十六に「学礼十」として『礼記』学記が編入されており、朱熹が生前に裁定済みである。該当箇所の解釈は鄭注をそのまま採用している。

以上のことから、「教うるは学の半ば」の出典となる『尚書』説命下と『礼記』学記について、その解釈は古注・新注ともに一貫していることが確認できた。すなわち、教えることが教授者自身の学において半分を占める、教えることの困難を自覚してさらに勉勵することにより学が進歩する、という意味である。

このうち『礼記』については、それ以外の解釈が周囲の文脈からして成り立ち得ない。これに対して、『尚書』の場合は、必ずしもこの解釈に限定すべき文脈とはいえない。独特の古拙な文体も手伝って、むしろ多様な解釈が可能である。『礼記』との整合性は絶対的な決定力をもつとはいえない。なぜなら、古書の引用においては「断章取義」ということがあり得るからである。

かくして、『尚書』解釈においては別解が提起されうることとなる。そしてそれは、教えと学びとの関係という原理的な問題としても展開可能なものであった。

二 別解・教えられることは学の半ば

前節で、朱熹が『尚書』説命下の「数学半」について「古注に従うべきだ」と述べたことを見た。しかし、その発言の文脈を見ると、別解の存在を考慮した上で、改めて古注の解釈を選択していることがわかる。すなわち、蔡伝にいう「或曰」である。本節では、この別解の内容を検討することにする。

『朱子語類』の当該の条を全文掲げてみよう。

因説「数学半」曰、「近見喻子才跋説命云、『教只教得一半、学只学得一半、那一半教人自理会。』伯恭亦如此説。某旧在同安時、見士人作書義如此説。

〔夔孫録云、「某看見古人説話不如此險。』先説『王、人求多聞、時惟建事』、此是人君且学且教、一面对会教人、一面窮義理。後面説『監于成憲、其永無愆』數語、是平正実語。不応中間翻空二句、如此深險。

〔夔孫録云、「言語皆平正、皆是実語、不応得中間翻一個筋斗去。』如説教只得一半、不成那一半掉放冷处、教他自得。此語全似禪語。只当依古注。』〔夔孫録云、「此却似禪語。五通仙人問仏、六通如何是那一通。那一通便是妙处。且如学記引此、亦只是依古注説。』賜。〕

「数学半」の説明のついでに言われた。「近ごろ、喻子才（喻樗の字）が説命にあとがきして『教えるのは半分を教えるだけであり、学ぶのは半分を学ぶだけである。残りの半分は人に自分で取り組ませるのだ』といっているのを見た。伯恭（呂祖謙の字）もそのように説いている。私がむかし同安にいた時、士人が尚書解釈の解答を作つてそんなふうに説いているのを見た。〔夔孫の記録では、「私の見るところ、古人の言い方はそんなふうには難解ものではない。』先だつて『王よ、人が多聞を求めるのは、それによつて事を建てるため』といっている。これは、人君が学びつつ教えるということ、一方では人を教えることに取り組み、一方では義理を窮めるのだ。後ろのほうで『成法に鑑み、どうか永く過ち無きよう』の教語をいつているのは、平明な、中身のある言葉だ。間で一句だけ宙返りをうつような、そんな深くて難解な物言いであるはずがない。〔夔孫の記録では、「言葉はどれも平明で、どれも中身のある言葉だ。間で一つとんぼ返りなんか打つはずがない。』もし、教えても半分を得るだけだというなら、まさか残りの半分は目立たない場所にうつちやつておいて相手に自得させるといふのか。この言葉が全くもつ

て禪語みたいだ。古注に従うべきだ。〕〔夔孫の記録では、「これじゃまるで禪語みたいだ。五通仙人が仏に問うた、六通とは、あとの一通とはどのようなものか、と。その一通こそが妙処なりと。それに『学記』でここを引くのも、やはり古注に従つて説いているわけだ。』賜の記録。』

ここに紹介される別解は、「教」を「教」と訓釈しつつも、教える主体と学ぶ主体とを別々に捉える。すなわち、教授者の教えを通じて学習者が獲得する学知は、学全体の半分にすぎない。残りの半分は、学習者が自力で会得するしかない、というのである。

ここでは、少なからぬ人物がこの別解の支持者として登場する。一人は喻樗という人物であり、一人は呂祖謙である。そしてもう一人は、朱熹が同安主簿であつたときに接した士人である。あとで参照する別の条では、朱熹の門人が「葛氏解」を挙げて同様の解釈を展開していることがわかる。すなわち、この解は当時、一定の支持を得ていたことが窺えるのである^③。

このうち、呂祖謙の解釈を見よう。彼は、朱熹とは学風を異にしつつも一定の協力関係にあり、博大な学識をもつて知られた人物である。彼の注解を門人・時瀾が増

此交修之義也。大抵教人と受教者、其功各半。師拳一隅、學者当以三隅自反、師告諸往、學者当以来者自悟。聖人之教人、引而不発、上一半固頼提指之助、下一半必自用工、可也。自古聖賢著書垂誨、載之方冊、其教止及於半、其工夫之半、學者必自加講求之功。故離群索居、固有孤陋之害、処師友之間、朝夕漸磨、亦有倚仗之害。蓋全倚師友不自用工、其害愈大。甘盤所以去之、説之ことば言及此、亦恐高宗全倚之也。これは「交々修める」（先立つ経文で、高宗が傳説に「予を交々修めよ」と言っている）の意味である。だいたい、人を教えることと教えを受けることとは、そのしごとがそれぞれ半分ずつである。師が一隅を挙げたら学ぶ者はあとの三隅をもつて自分で返すべきだし（『論語』述而を踏まえる）、師が前のことを告げたら学ぶ者は後のことを自分で悟るべきである（『論語』学而を踏まえる）。聖人が人を教えるには、導きつつも啓発しない。前半は当然、指導の助けに頼るけれども、後半は必ず自分で努力するようにするならよろしい。古来、聖賢の著書や教えは書物に載せられているが、その教えはただ半分に達するだ

けであつて、その努力の半分は、学ぶ者が必ず自ら研鑽を加えねばならない。それゆえ、群れを離れて引きこもることに固陋の害があるのはもちろんだが、師友の間で朝夕薫陶し合うのにもまた、頼つてしまふ弊害がある。思うに、師友に全く頼り切つて、自分で努力しないのは、その害がいよいよ大きい。甘盤が去つた理由、傳説の言葉がここに及んだのは、やはり高宗が頼り切るのを心配したからである。

呂祖謙の解釈に従うならば、「数学半」の「教」が教えることであるのに対し、「学」は教えを受けることである。そして、ここでは教えを受ける側の主体性が重要であることが力説される。教師や聖賢の教えは、学ぶ側の学問において半分を与えるにすぎない。あとの半分は自らの努力によつて自得すべきである、という。この場合、「数学半」の訓読は「教うると学ぶと半はす」となるうか。

こうした解釈に対し、朱熹は前後の文脈を吟味して、周囲の文言がいずれも「平正実語」であるのにここだけが「深險」であるはずがないとして退ける。その結果、古注に従うべきだとする。

朱熹の判断は、現代の我々から見ても妥当であろう。

別解に一定の道理がないわけではない。むしろ、教えと学びとの関係について一面の真実をついている。さらに、呂祖謙が挙げるように、『論語』との整合性という経学的理由もある。にもかかわらず、教えることと学ぶこととのダイナミックな相互関係は、この別解のもとでは失われてしまう。それはひとえに、教える主体と学ぶ主体とを別人としたことに由来する。朱熹が指摘した「深險」（深險）とは、このことが文義の解釈上にもたらす、主語の飛躍的な交代（宙返り）を指すであろう。

ところが、興味深いのは、朱熹自身がこの解釈に傾いた形跡があることである。『朱子語類』卷七十九所収の沈僩録から一部を引こう。

或峯葛氏解云、「傳説与王説、我教你者、只是一半事、那一半要你自去行取。故謂之終始。」曰、「某旧為同安簿時、学中一士子作書義如此説、某見它説得新巧、大喜。之後見喻子才跋某人説命解後、亦引此説。」

ある人が葛氏解を挙げていった。「傳説は王に言いました。私があなたに教えるのは半分のことにすぎない。残りの半分はあなたが自分でつかみ取らねばならない、と。ゆえにこれを終始というのです。」

おっしゃるには、「私がむかし同安の主簿だった時、学校の一人の士人が尚書解釈の解答を作ってそんなふうに言っていた。私はそれが新奇で巧みな説き方なのを見て、大いに喜んだ。その後、喻子才が誰かの説命解の後ろにあとがきしたのを見たら、やはりこの説を引いていた。」

同安の主簿として一士人の解答に出会った件はさきの条と同様の話柄だが、朱熹は「大いに喜んだ」という。

したがって、この解釈に誘引される素地は朱熹自身にもあったことになる。朱熹は文脈の検討を経てこの解釈を退けるのだが、別解が強調する自得の重要性それ自体は、朱熹にとつても首肯されるところだったのであろう。

しかも、朱子学を奉じたその後の学者においては、蔡伝に従う人々が多かった一方で、別解の側に与する者も少なからず存在した。

たとえば、朱子学派の宣揚に力を尽くした功績で知られる真徳秀は、呂祖謙も蔡沈もともに引用したあとで次のように按語を加える。

愚按、蔡説与学記合。然呂説亦有意义。蓋説雖教高宗以為学之道、然所發明者、特半之而已。自余則高

宗自用其功、可也。故曰、「念終始典于学」。未見為
釈氏機權。姑並存之。（『西山読書記』卷二十「学」）
私の考えでは、蔡説は「学記」と合致する。しかし、
呂説にもまた深い意味がある。思うに、傳説は高宗
に学問の道を教えたのだが、明らかにしたのはただ
半分だけであった。残りは高宗が自分で努力をすれ
ばよいとした。それゆえ、「終始つねに学を思え」
といったのだ。（蔡伝のいう）仏教の対機説法であ
るとは思われない。しばらく並べて残しておく。

すなわち、文脈を考慮しても呂説はなお成り立ちうるよ
うのである。

その後、元代までの朱子学者はこの句の解釈に対して
どのような態度を取ったか。

まず、蔡伝を基本とした纂注本において、呂説や真徳
秀説を併記するものがいくつも見られる¹⁾。別解を積極
的に主張したものとしては、元の王充耘『読書管見』が
ある。

伝謂、教人所得、居自学之半。蓋教学相長。此理固
有之。但傳説此言、為高宗而發。不知高宗学成之後、
使之転教何人、方可以足成那一半。若不教人、則高

宗所学、終是不全矣。以此觀之、則教者止得一半、
学者当自用功、如拳一隅能以三隅反之類。未見其為
^{マツ}儉巧也。（卷上）

伝（『礼記』学記）には、人を教えて得るものが自
分の学の半ばを占める、なぜなら教えと学びが伸ば
し合うからだという。こういう道理はもちろんある。
しかし、傳説のこの言葉は高宗のために発したのも
である。高宗の学が成ったあと、耘じてどういう人
を教えさせれば、残りの半分を完成させるに十分だ
といえるのがわからない。もし人を教えなければ、
高宗が学んだことはついに全うされないことになる。
このことから見れば、教えとは一半を得るに止まり、
学ぶ者は自ら努力して、一隅を挙げたら三隅をもつ
て返すといった具合でなければならぬのだ。この
説が難解巧妙だとはいえない。

明らかに、蔡伝が「或曰」を退けた論拠を批判し、文脈
上は別解のほうが自然だとする主張である。ただし、後
に見るように、朱熹の考えでは、学がいちおう成つた者
は人の上に立つて教えるべきものとされた。君主の統治
そのものが教える側面をもつということもできる。王充
耘の捉え方は「教え」の理解が偏狭であるように思う。

これとは別に、別解と近い解釈を提起した朱子学者として、王柏と金履祥の師弟も挙げることができる。王柏『書疑』巻三は、この一節の意味として、教えを受ける段階の人はにわかになを教える立場には立てないことだという。教えによつて得られるのは一半にすぎず、みずから「探討尋究」しなければその「精微曲折の詳」を尽くすことはできない。金履祥が『尚書表注』上ならびに『書経注』巻六で述べる解釈は、これをより経文の文脈に引き寄せたものである。すなわち、高宗がもともと甘盤から教えられた内容は未だ完全ではなかったので、傳説がこれを十全なものとしてべく訓戒したのである、という。甘盤から教えられたのは一半にすぎない、との意味である。

朱熹その人の解釈や蔡沈『書集伝』の存在にもかかわらず、ほかならぬ朱子学者たちの中から別解（もしくはそれに近い解釈）の支持者が輩出していた様子が窺える⁵。このことは何を意味するののか。

やはり、朱子学そのものの中に、学ぶ主体の自得を重んじる側面があったことが大きいであろう。教えられ得ず悟るほかない領域に学の真髄を見る態度といつてもよい。呂祖謙らの別解は、このことを経文から直截に読みとろうとする点がわかりやすく、歓迎されたのではない

だろうか。

そこで、改めて問題になるのは朱熹の態度である。朱熹が別解を退けたのは、自得の重要性を否定したからとは思われない。学問の自得的要素は朱熹の所説の中に厳として存在する。たとえば、「格物致知」論における「豁然貫通」などは、一種の悟り体験としての側面を否定しがたい。しかし、そのことを『尚書』の「敦学半」の解釈として展開することは危険だと見られたのだろう。したがって、朱熹の別解排除は、単なる否定ではなく、一種の止揚として見られなければならない。そのように解したときに導き出される解釈について、第四節で検討することとしたい。

三 逸脱・体・用としての学・教

蔡沈『書集伝』には、教えることと学ぶこととの関係を体・用、内・外の関係として捉える部分があった。体・用とは、本質と現象、本体と作用など、一つの事物を両側面に分けて捉える概念化である。また、内外の合一は、『中庸』を典拠として宋代の道学が目標とした一種の境地である。ここでいえるは学ぶことが内、教えることが外にあたるであろう。体・用、内・外いずれも、教と学との強い一致関係を主張するための論理である。

同様の論理は、陳澧『礼記集説』にも見られる。

引説命数学半者、劉氏曰、教人之功、居吾身学問之半。蓋始之脩己、所以立其体、是一半。終之教人、所以致其用、又是一半。此所以終始典于学、成己成物合内外之道、然後為学問之全功也。

「説命」の「数学半」を引くのは、劉氏が言うには、「人を教えるしことは我が身の学問の半分を占める。そもそも、始めに己を修めるのは、その本体を確立するためで、半分である。終わりに人を教えるのは、その作用を実現するためで、これもまた半分である。これが『終始つねに学を思う』ということであり、自己を完成し他者を完成させ内外を合一させる方法である。そうであつてこそ、学問のしごとの全体といえるのである。」

「劉氏」が誰であるか等いまだ突き止めていないが、ここでは、蔡伝と同様の論理で教と学との関係が把握されていることを確認すれば足りる。

問題は、こうした把握が朱熹の理解と一致しているかどうかである。前節に見た別解とは異なり、教えることが教授者自身の学の半ばだという大枠においては、理

解は一致しているといつてよい。しかも、体・用や内・外の論理を用いることには、図式的なわかりやすさがある。しかし、まさにこの論理を導入することによつて、微妙なズレが生じ得るのではないか。こうした論理自体は、朱熹自身が頻繁に用いているものではあるが、「数学半」の理解にこれを適用してよいかどうかは、疑問の余地がある。

というのも、体・用や内・外の論理で捉えられた教・学関係は、以下のようなものとなりがちだからである。すなわち、一方に体・内としての狭義の学（自己の完成）があり、もう一方に用・外としての教（他者の完成）がされる。このとき、狭義の学は自足した単位として広義の学の一半を構成しており、教えるという行為はそれを他者に及ぼし、社会的効果を發揮せしめるものと理解される。このとき、古注に見られた、教えることを通じての己の学の深化というダイナミズムは見失われてしまう懸念がある。「古注に従うべきだ」といった朱熹は、本当にこのような意味で教・学の関係を捉えていたのだろうか。

このことを考えるために、『朱子語類』卷七十九の沈侗録でどのように言っているかを見てみよう。

「惟数学半」、蓋己学既成、居于人上、則須教人。自学者、学也、而教人者亦学。蓋初学得者是半、既学而推以教人、与之講説、己亦因此温得此段文義、是教之功亦半也。

「惟数学半」とは、己の学が成就したあと人の上に立つたなら、人を教える必要がある。自分で学ぶのは学であるが、人に教えるのもまた学だ、というのだ。というのも、最初に学びとつたことは半分なのだ。学んだ後でそれを推し及ぼして人に教え、彼らと講説を行うときには、自分もまたそれをきっかけにその部分の文義を復習できる。これは、教えることとの効果も半分あるということだ。

ここでの「学」の焦点は経書の解釈にあるものようだが、最初にいわれる学の成就が、さしあたりの成就にすぎないことが明らかに見て取れる。教えるという活動においては、すでに自らが学び得た内容を自分の中で反復し、理解を深めていく過程が不可避的に伴っている、というのである。

これが、体・用の論理を硬直的に適用した場合の教・学関係とは似て非なるものであることは明らかであろう。

教えることが何の半ばなのかという点で対比するならば、体・用の論理では自己完成と他者の完成とからなる広義の学の半ばであり、狭義の学としての自己完成はすでに完成態として捉えられる。これに対して朱熹の把握では、自己の学そのものにおいて教えることが半ばを占めることになる。この点で、蔡沈や陳澧の解釈は、新注とはいいながら、その学問的主柱であるべき朱熹の理解からは逸脱する可能性をはらんでいる。

ただ、こうした解釈がなされることにも理由がないわけではない。体・用や内・外の論理を朱熹自身が頻繁に用いることはすでに指摘した。そして、朱熹の発言においても、己の学がいちおうの成就を見たら進んで人を教えるべきことが主張されていた。朱熹が重視した『大学』における修己治人の段階的把握とも整合的である。このとき、当初の学の成就が「いちおうの成就」にすぎないことを見落とすならば、図式的理解にたやすく絡め取られることになるだろう。

朱熹への注目を離れて、より広く宋代の道学系経書解釈に眼を向けるならば、蔡沈や陳澧（および彼が引く劉氏）の解釈に類例を見いだすことは容易である。呂祖謙の師である林之奇の『尚書全解』巻二十にいう。

然人之学也、豈以独善其一身而已哉。『中庸』曰、「誠者、非自成己而已也。所以成物也。成己、仁也。成物、知也。性之德也、合外内之道也。故時措之宜也。」蓋学者既遜志時敏以成己、必在乎推而教人以成物。能成己又能成物、則可以合外内之道、而忠恕而尽。此蓋為学之終也。故繼之曰、「惟敦学半、念終始典于学、厥德修罔覺。」言推己之所有以教人、是敦学半。蓋学之始、仁以成己、学之終、智以成物。自成己推而成物、其功半矣。於功之半能思終始常於学、則雖推以教人、而已之德実由是而進、日加益而不自知也。此所謂「厥德修罔覺」、言推此道以先知覺後知、以先覺覺後覺、有益於人、是乃有益於己也。しかし、人の学はその一身だけを善きものとするにとどまるであろうか。『中庸』にいう。「誠とは、自ら己を完成させるだけではない。他者を完成させるためのものである。自己を完成させるのは仁であり、他者を完成させるのは知である。性の徳であり、外と内とを合一させる道である。そこで、時に応じて適切に実施されるのである。」そもそも、学ぶ者はすでに「志に従い時に敏なる」(「説命下」の先行経文にもとづく)ことで己を完成しているので、必ずそれを推し及ぼし、人に教えて他者を完成させるべ

きである。自己を完成させることができ、さらに他者を完成させることができるならば、外と内とを合一させる道によって忠恕の両方を尽くすことができる。これが学問の終わりというものである。それゆえに、これに続けて「惟れ敦^{おび}うるは学の半ば、終始つねに学を思わば、その徳修まるも覺ることなし」というのだ。その意味は、己がもっているものを推し及ぼして人に教えることが「敦^{おび}うるは学の半ば」である。なぜなら、学の始めには仁によって己を完成させ、学の終わりには智によって他者を完成させるので、自己の完成から推し及ぼして他者を完成させることは、そのしごとが半分にあたるのだ。しごととの半分において、終始つねに学とともにあるように思念するならば、推し及ぼして人に教えるのではあつても、己の徳は実にこのことによつて進んでいき、日ごとに益していきながらも自分ではわからないのだ。これがいわゆる「その徳修まるも覺ることなし」であつて、その意味は、この道を推し及ぼして先知の立場から後知をさとらせ、先覺の立場から後覺をさとらせ、人に益があるということは、実は自己に益がある、ということだ。

文脈上、前後の経文の説明と関連するので引用が冗長となったが、『中庸』の表現を利用しつつ、自己の完成と他人の完成、内外合一の關係として教・学を捉えている。体・用の論理は用いていないものの、蔡・陳両説との共通性は明らかであろう。そして、林説がいう学の半ばとは、教えることが人を完成させ裨益するものであることによつて教授者の徳が進んでいく、ということにある。したがつて、狭義の学を他者に向けて拡張することとして広義の学が捉えられており、すでに自ら学んだ内容が教えることで深められるといったプロセスには、やはり注意が向けられていないように思われる。

朱熹の思想ないしは道学系の学問の発想そのものに、「教うるは学の半ば」というときの教・学關係を体・用、内・外の關係で捉えさせる傾きが伏在していたことは確かである。しかし、朱熹自身がそこまで踏み出していないことに、私は大きな意味を認めたい。それによつて、教えることと学ぶこととの動態的關係が明瞭なものとして確保されるからである。それは、いわば朱熹のバランス感覚によるものでいいようか。

蔡沈らが体・用や内・外といった用語で捉えたかったのは、広義の学問における教えることの不可欠性であった。ただし、その不可欠さは、朱熹の理解に還元して捉

えることによつてより深い意味を獲得する。教えるという活動を欠いては、自らの学びの最終的完成はない、というのである。

四 改めて「敦学半」の含意を考える

「敦学半」に対する朱熹の解釈は、結局、しごく平明である。「教うるは学の半ば」の現在通行の意味と、何ら異なるものではない。

しかし、彼が退けた別解との關係や、新注に懸念される彼の理解からの逸脱を考え合わせるとき、この平明さが必ずしも自明とはいえない事情を垣間見ることが出来る。古注と異なり、朱熹の場合には、別解を退けた上で、あるいは自らの理論による図式的整理にも陥ることなく、その解釈が選び取られているわけである。その意味で、古注よりも深いレベルで彼の解釈を受け止めるべきことになる。

この事情を踏まえて理解するとき、「敦学半」は現代の我々にとつてどのような含意を持ちうるであろうか。

「研究ノート」の自由度を利し、いささか漫談にも及びたい。

「教えられることは学の半ば」とする別解を排除すべき理由として朱熹自身が挙げていたのは、文義が難解に

なってしまうこととともに、禪語に似ることであった。すなわち、自得のためには、何かに依存することができない。学問の半分までが自得に委ねられるとすれば、多くの学習者を茫漠たる状態に置き去りにすることになるだろう。あたかも、突拍子もない問いかけにきよんとして師の棒喝を食らう禅僧のごとくに。

しかし、批判のポイントはあくまでも、自得の領域が大きすぎることにあったと思われる。朱熹は学ぶことにおける自得の重要性までも否定したのではない。さもなければ、当初はこの別解の新奇さを喜んだことをうまく説明することはできない。

朱熹にとって自得とは、あくまでも聖賢の書物や師友の教導に伴われつつ自らの修行を積み、その内容の確証として得られるべきものであったはずである。そして、その限りにおいて、自得は学の完成にとつて不可欠であった。

「数学半」においても、そこで言われる「学」の内容として、自得の要素は当然含まれていると見るべきである。すなわち、教えるにあたって自らの理解を深め、また、困難にぶつかって自らの浅さを思い知るといった過程には、随所に自得の経験が伴うべきものであろう。別解の立場に立てば、教授者は教えた後はただ学習者の自

得を待つばかりである。しかし、朱熹にとっては、教授者もまた自得の経験を深めていくのでなければならぬ。一方、新注に見られる朱熹からの逸脱は、学ぶことと教えることを広義の学における体・用関係、いわば車の両輪と捉えることであつた。しかし、この関係は、朱熹の把握に即しているなら、「学がいちおう完成したら、人を教えるべきだ」というものである。しかも、人を教えることそのものが、自得を伴つた学の深化なのであつた。自らの学がいちおうの完成から真の完成へともたされるためには、教えることが必須なのである。蔡沈らは、こうした関係を明快な図式で表現した代償として、

教えなければ真の学問の完成はない。その理由は、「教える」ことが他者との遭遇であることに求められると思う。すなわち、己の学において自足するとき、その学問は、他者からは理解不可能なままに独善に陥る危険がある。「教える」という活動によつてはじめて、己の学は他者による検証をこうむることとなる。ここで出会う障害の一つ一つが、教授者にとつては、自らの学を反省し自得を深めるための契機となる。そのことを通じて、自得的でありながら他者にも理解可能であり、しかも他者をも自得へと促しうる学問が鍛えられていくのである

う。このことの言い換えとして、真の学問は教えることができるものでなければならぬ、ということも成り立つてであろう。

と、ここまで論じてきて、我が身を振り返るに忸怩たるものがある。そこで予先を転じてみたい。

現在の大学教育には、問題解決能力の向上を重視した授業設計が幅広く取り入れられているらしい。たとえば、グループ分け等により学生どうしの教えあいを促すといった授業形態がある。それによつて授業内容の定着率を向上させることができることも聞く。

「教うるは学の半ば」とは、まさにこうした授業形態に符合する格言であるように思われる。教えることを通じて学習内容がよりよく定着することは、さもありなんとと思われるのであつて、そのことの理由は、経書解釈の舞台ですでに洞察されているとおり、教えるためにはより十分な理解を必須とすることに求められるであろう。

こうした授業形態そのものは、私としても反対ではない。授業内容が適している場合には取り入れてみたいとさえ思う。しかし、本稿で縷々問題にしてきた解釈に照らせば、こうした授業における教師の存在をこそ問うべきではないかと考える。

学生はたしかに、教えることを通じて学の半ばを益す

であろう。しかし、この授業を運営している教師はどうか。学生が教えている内容、それをつうじて理解されるべき内容を掌握してはいるだろうが、その内容について困難にぶつかり、自らの学を深めていく存在では、もはやないのではないか。もちろん、学生の参加をとおして、教師にとつても予想外の問題解決が切り開かれる可能性はある。ただ、多くの場合、解決されるべき問題自体は教師が設定するのであろう。その問題を設定する教師の問題意識までもが問われる場面を、こうした授業設計が想定しているとは思われない。教師は、自らの学によつて学生の主体性を粹づけ、自らはその粹の管理者へと成り上がってしまうのである。

「教うるは学の半ば」という格言が真に啓発的であるのは、教師自身が学の完成の途上にある、もしくは、あるべきだ、と示唆することによる。「教える」ことは、自らの学問をときに解体させるほどの危機を内包しているであろう。しかし、その危機を回避して学問が進むこともまたあり得ないのである。

おわりに

漫談もこの程度とし、最後に、本稿執筆をつうじての学問的な気づきを記しておこう。

当初の予定では、古注と新注との一貫性を確認して、

ただちに「教うるは学の半ば」の含意の検討に移るつもりであった。ところが、呂祖謙をはじめとする別解が意外な広がりをもっていることに気づき、その調査に時間を取られる羽目となった。といっても、『通志堂経解』、『百部叢書集成』、『四庫全書珍本』の範囲で該当箇所を繰ってみたにすぎないが、新鋭の検索工具を駆使すれば宋・元時代の経学の状況や呂祖謙学の影響力などについて新知見が得られるかもしれない、などと妄想をふくらませた次第である。これは必ずしも私個人の今後の課題には直結しないが、伝統的な「中国哲学」研究にも未開拓の領野はまだまだありそうだという感想である。

かくして、本稿の執筆は私自身にとつてはいささかの学びがあったが、それを教えられるかという自信がない。どうやら私は、学の半ばに止まらざるを得ないようである。

注

(1) 「敦」がなぜ『礼記』では「学」となっているのか、「説命」がなぜ「兌命」と表記されているのか、は、ここでは問わない。ここには経書の今文・古文の問題が介在している。『尚書』説命下は、現在の通説では、魏晋の頃に偽作された偽古文尚書の一篇である。『礼記』学記は「兌命」を引用するが、これは、漢代に存在し、その後散佚した本来の「古文尚書」に基づくと考えられる。現行の『尚書』説命下は、むしろこれを材料として取り込んだものである。本稿では記述の便宜上伝統経学の立場をとり、『尚書』のほうを先行するものとして扱う。

(2) 古注とは漢唐の訓詁注疏の学の成果をいう。新注とは、広義には宋以後の注釈をいうが、本稿ではとりわけ元明以後の科挙に採用された朱子学系統の注釈を指すこととする。

(3) 寓目しえた限り、宋代に呂祖謙以外でこの解をとつた注釈としては、夏僎『尚書詳解』卷十四、陳経『尚書詳解』卷十七、黄度『尚書説』卷三、胡士行『尚書詳解』卷五が挙げられる。陸九淵門の袁燮『梨齋家塾書鈔』卷七にも部分的に重なる解釈が見える。朱子学者におけるこの解への支持については後で触れる。

(4) 王天与『尚書纂伝』卷十五下、董鼎『書伝』卷三の纂註、陳樸『書集伝纂疏』卷三。ただし、陳樸は案語で「学記」

との整合を支持する。陳大猷『書集伝或問』巻下は明示的に呂説もまた善しとする。纂注本以外のもので、元の朱祖義の『尚書句解』は、兒童用の課本として多く蔡伝を宗とすると称されながら（『四庫全書総目提要』巻十二・書類二）、該箇所はむしろ別解を採っており、夏僎『尚書詳解』を利用した形跡がある（巻五）。

(5) 明代以後の動向については今回ほとんど調べていない。わかる範囲でのみ付言する。まず、明初に標準解釈を公定した『書経大全』は蔡伝を基本としており、該箇所について真徳秀は引くものの、呂説を容認した部分は引かれな
い。馬明衡『尚書疑義』巻二および袁仁『尚書砭蔡編』
〔『学海類編』では『尚書蔡註考誤』と題す〕が別解を支持するものが、いずれも陽明学に親近した人物であるのが注意される。明末から清代にかけては弁偽の風潮が強まり、現行「説命」篇の偽作が決定的となるにつれて、それに対する注釈についても関心の対象外となつていったように思われる。

（山口大学人文学部）